

高等学校における生徒の自治活動の活性化に向けて

— 自治会顧問の役割とその文化の伝承 —

学 籍 番 号	239130
氏 名	山本修平
主指導教員	田中俊弥
副指導教員	田村知子

1. 背景

1.1 研究の背景

本校は自主自立を重んじ、生徒による自治活動が活発な学校で、生徒に行事の企画・運営、部活動の組織編制、予算管理など、幅広い責任を委ねている。生徒指導部の中から自治会顧問を任された教員が自治会行事の企画を行う生徒たちの対応をしており、生徒とのやりとり多くの時間が費やされている。また校内人事による異動が激しく、引き継ぎが不十分で自治会顧問が先を見通して動くことが難しかった。

1.2 生徒指導部の課題

背景にもあるように本校は自治活動が特色であり、学校行事を生徒が一から作っている。さらに行事の進捗状況の把握に生徒との対話は欠かすことができず、その対応に膨大な時間が使われていた。行事の企画、準備に関して、生徒同士で議論は繰り広げられているものの、教員から見ると無理難題である部分もある。そのことを生徒にも納得させつつ、生徒が作ってきたベースを残しながら生徒指導部以外の教職員にも理解してもらう必要がある。そういったことから生徒指導部の教員は時間的にもメンタル的にも負担を強いられる場面が多い。そのため生徒指導部の業務改善を目指すとともに、生徒との対話の窓口になる自治会顧問及び生徒指導部の教員の「ワーク・ライフ・バランス」の推進に取り組み、生徒指導部の教員にとって働きやすい環境への改善をめざすこととした。

2. 実習の成果

2.1 基本学校実習Ⅰ・Ⅱの成果

基本学校実習Ⅰでは、まず生徒指導部の業務を詳細に分析し、教員の負担、やりがい、教育的効果の3つの指標を用いて、6件法に基づくアンケートを実施した。このアンケートにより、「教員の負担」と「教育的効果」の関連性を調査し、負担が高く教育的効果が低い業務を特定することに成功した。また、「教員のやりがい」と「教育的効果」の関連性を調査したところ、教員がやりがいを感じる業務は、教育的効果も高いという結果が得られた。教員がやりがいを感じず、教育的効果も低いと考えられる業務については、生徒に委ねることで、生徒の学びを深め、教員の負担も軽減することが可能だと考えた。

基本学校実習Ⅱでは、分掌業務に関連する負担を「ストレス」と定義し、厚生労働省のストレスチェックを基に作成した「分掌の仕事に関するアンケート」を本校の教員に実施した。その結果、生徒指導部の教員と他の分掌の教員が感じているストレスを比較したところ、他の分掌の教員のストレスの方が高いことが明らかになった。これは「生徒指導部」の負担が大きいわけではなく、「生徒指導部の自治会顧問」の負担が飛び抜けているだけではないかという事実が浮かんできた。むしろ生徒指導部の協力体制は他の分掌よりも高く団結出来ているということが分かった。

2.2 発展課題実習Ⅰ・Ⅱの成果

基本学校実習の結果を踏まえて実践課題研究の目的を協働性の高め方にシフトし、本校で自治会顧問を担当してきた教員にインタビューを実施した。その結果、①やりがい、②時間的な負担、③心理的な負担、④仕事のポイント、⑤自治会顧問のサポート体制について、⑥負担軽減について、⑦生徒指導部の協働性の高め方、⑧生徒との関係、生徒との協働性の高め方、⑨生徒指導部を外から見て、⑩自治会顧問のあり方、について回答をまとめることが出来た。

今回の研究テーマにつながる⑦生徒指導部の協働性の高め方、⑧生徒との関係、生徒との協働性の高め方について分析すると、両者に共通するのは「よく話す」という部分であった。教員同士であっても教師と生徒であってもお互いにしっかり話をして自分の意見や考えを伝えることが協働性を高めることにつながるということがわかった。また生徒に三人行事を通して経験できたことをその行事の委員を経験したか、委員を経験していないかで分けてアンケート調査を行った。アンケート項目は、「準備に参加した」「行事を楽しめた」「行事の役割を達成できた」「行事を通して成長できた」の4つである。委員をしている生徒の方が肯定的な回答が多く見られたが、統計的に優位であるという結果には至らなかった。

3. 今後の課題と展望

この2年間、本実践研究に取り組んだ結論としては、「協働性を高める」ということにおいても、主語が教員の協働性なのか、生徒同士の協働性なのか、教員と生徒の協働性なのか、を絞って調査することが出来ず、その成果を計ることが出来なかった。また「協働性を高める」ための手段、方法をどうすればいいのかといった部分によってアプローチの仕方が変わるので、その部分においてももっと的を絞って調査した方が効果的だったように感じている。

また来年度は過去40年以上10月末に実施されていた音楽祭を1学期に実施しようという動きもある。これは本校の行事が2学期に集中しており、例年音楽祭の練習が始まる時期と修学旅行が重なることで、生徒の意識が分散していると教員からも意見が出ている。また近年は国公立大学の推薦入試などが増え、その準備を9月、10月からスタートさせる3年生もあり、音楽祭の3年生の参加率が低いクラスがある。そういった背景もあり、来年度は音楽祭の1学期実施が議論されている。

生徒の協働性、生徒指導部と生徒の協働性を高めるためには、こういった学校全体を巻き込んだ行事の改革も必要ではないかと考えている。音楽祭の1学期実施が生徒たちにとって協働性を高めることにつながるかは不明であるが、生徒としっかり対話し、生徒の自治活動が活発になるように生徒指導部としても尽力していきたい。